

聞き書き史談ほか萬控え(五)

海部の相撲史を追って その一

林 寅 喜

(会員・佐伯市中の鳥)

今日のようにテレビやラジオなど、放送設備の全くなかった幕末から明治・大正にかけて、相撲にはなぜか老若男女を問わず人気があった。中でも宮相撲は地域的な対抗意識もあつてか最も隆盛を極めた。

しかし、これも時代と共にスポーツの多様化と、東(東京)西(大坂)相撲が合併して興行されるに至り、今は昔の面影など見るべくもないが、毎年春秋の祭礼と併せて行なわれていた寺社の奉納相撲や勸進相撲には、大勢の観客が詰めかけて鬮^{ひいき}頂^{かみ}の力士に声援を惜しまなかったという。

相撲は腕・腰・脚に力を付けることを基本とし、三位一体となつてこれを鍛えなければ上達せず、強くもならないといわれている。

今回の調査で分かったことは、相撲に熱中した若者達

の多くが、海岸部の村々に集中していたことである。ことに幕末から明治初年にかけてが多い。その理由として考えられることは、漁業に携わる人々に足腰の強い若者が育つたこと、上浦・荒網代・松浦など各地から「閑取」を目指して角界入りをした人達が、故郷に帰って後進の指導に当たったのと、浅海井浦出身の瀧風が、十一代藩主高泰公のお抱え力士(後述)として登場したこと、などによつて相撲道の高揚に拍車がかかったのではないかと考えた。

調査は、先ず残された記念碑や墓石等を調べることから始め、生家を尋ね寺に行き、過去帳を拝見するなどしましたが、なお且つ不明な部分が多い。ことに人物像や逸話などに至つては、三、四人の他は何も聞き取ることが出来なかつた。今後の研究課題としたい。

以下は調べた人達のうちから大坂相撲に入門していた人、入門はしなかつたが「頭取」(註)の免許を与えられた人、または師匠から譲渡された人、相撲が強く逸話を多く残した人など、幕末から明治にかけて、活躍した力士達の群像をまとめた。

なお、掲載した十三人のうち十人は生年順としたが、

不明な三人は没年順とした。

註 頭取は番付ではなく、相撲の興行を統轄できる資格を認められたもので、大坂相撲頭取から直接授与された場合と、前者がその弟子に譲渡した場合の二種があった。その文面は左の通りである。

証

其許儀従来相撲執心ノ廉ヲ以テ今般頭取ニ任ジ置候条御布告等ノ公則及ビ相撲仲間ノ規則ヲ確守シ平日違背セサル様可致注意候依而如件

明治卅八年十月十五日

大坂相撲頭取 時津風政衛門

大の松長造どの

免許状

(郷土読本より転記)

其許儀従来穩厚ノ性質物事ニ実着且角力熱心成ヲ以拙者相勤居角力頭取取締役大坂頭取時津風ノ免許状貴殿へ譲渡候条公則及角力仲間規則確守違背無キ様可被注意致候依テ免許状如件

大正十三年正月十七日

嶋威藤右衛門

瀧の音治策丈エ

(上浦町の文化財より転記)

瀧風孫平

本名は木村孫平、文化十一年(一八一四)上浦町浅海井浦に生まれた。瀧風公園の記念碑横に建てられた孫平伝によれば、子供の頃から相撲が強く、十六才の時大坂相撲時津風部屋に入門して、三年の間厳しい修業を積み、優れた「関取」となって故郷上浦に帰って来た。

これを聞いた十二代藩主高謙公は、早速孫平をお抱え力士としたため一躍有名となり、近郷近在から入門者が相次いだとあるが、十輪寺の過去帳によれば、孫平は明治十年六十四才で死亡しているので、お抱え力士としたのは高謙公(文久二年「一八六二」襲封)ではなく、十一代高泰公(天保三年「一八三二」文久元年「一八六二」)ではなかったかと思う。理由は高謙公の時代では孫平の年が四十八才以降となり、お抱え力士とするには少々遅すぎたと思うからである。

このような経歴があったからか、記念碑は明治八年死亡する二年前、関係者によって建てられたものである。

刻まれた文字は、風化して読み取れない部分が多い。したがって、人数に正確さを欠くかも知れないが御谷赦の程を、なお、読み取りは右から左へ上段から下段の順に行った。列記すると次ぎの通りである。

世話人他	十七人	福良	四人
□崎	三人	夏井	三人
木立	五人	蒲戸	七人
地名不詳	八人	日向泊	三人
荒網代	十六人	高松	四人
地名不詳	十三人	守後	六人
浪太	十五人	宮ノ内	一人
晞干	二人	千怒	一人
網代	二人	小計	一一〇人

これだけの人数から考えて孫平は、当時佐伯藩の角界で頂点に立つ人物ではなかったかという気がする。他の力士の碑にはこのような人数は刻まれていなかった。

孫平伝によれば、帰郷後十年位経ってそろそろ引退の決意を固めていた頃、九紋龍が現われて勝負を挑まれ、御前相撲で勝敗を決したが、結果は孫平が勝ち名乗りを上げたという。



(二) 八島山助四郎

本名は成松助四郎、鶴見町沖松浦に生まれた。同所吉祥寺境内に墓があり、明治十年（一八七七）八月行年五十九才と刻んであるから、出生年は文政二年（一八一九）になる。

助四郎は、沖松浦北野の成松家に四男として生まれた。成松家は三百年前から続く吉祥寺の祭礼時に、御開扉の創始者を務めた成松助三郎の末裔であるという。

子供の頃から巨体に恵まれて腕力があり、近郷の宮相撲では敵対する者がなかったと言い、若い頃大坂相撲の

時津風部屋に入門して厳しい修業を重ね、「関取」まで昇進して郷里に錦を飾ったが、残念ながら躰つきや得意技など力士像は何も語り継がれていない。晩年は後進の指導と相撲道の普及に努めた。

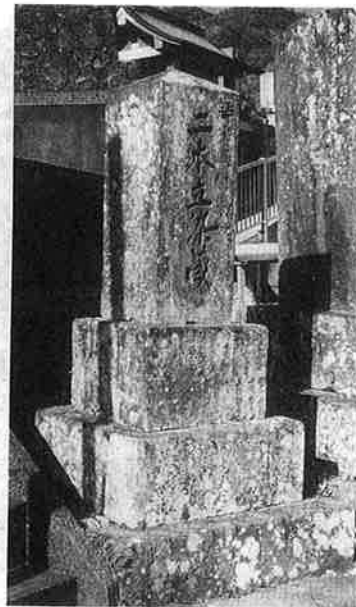
墓には指導を受けた弟子や若者達の名が刻まれているが、そのうち弟子であったと思われる人は十四人である。

後年になって地域の人達が力の強かった助四郎を偲んで、生家の屋号を「大力」と呼ぶようになったと言い、それは今も続いている。



(三) 二本立染蔵

本名は児玉染蔵、文政六年（一八一三）上浦町浪太浦に生まれ、明治十二年（一八七九）五十七才で死亡した。墓は浦中が一目で見渡せる（今は線路で遮られている）常照寺墓地の一角にあり、台石には浅海井「頭取」瀧ノ音五郎吉と吉野川芳五郎のほか、三十一人の弟子の名が刻まれている。



正面には時津風門人とあるから、大坂相撲時津風部屋に入門していたことは確かであるが、何才の時からか、また何年の修業を積んで上浦に帰って来たかなど、詳しいことは分からなかった。なお、弟子が三十一人と多い

ことから考えて、上浦では瀧風に次ぐ実力者であったかも知れないが、瀧風の死後二年しか経っていない上、九才も年若の死であった。

〔四〕 八嶋山市蔵

沖松浦の吉祥寺過去帳には良八事市蔵と記されており、死亡は明治四十一年（一九〇八）二月、八十才であったとしている。助四郎と同じ沖松浦に生まれたが十才年少であった。

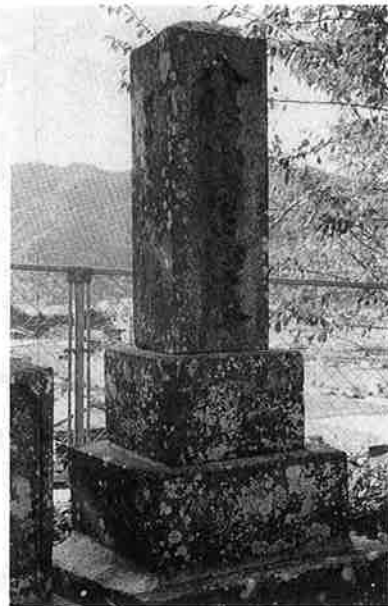
子供の頃から筋骨逞しく、長ずるに及んで助四郎の弟子となり、日夜稽古に励んでいたが、一念発起して大坂入りをした。墓石には大坂湊門人と刻んであるから、今の湊部屋の前身なのかも知れない。苦節の甲斐あって「頭取」を授けられ、四股名も八嶋山（二代目）と改めた。引退後は故郷に帰り、助四郎亡き後を受けて弟子の育成に努めた。墓石に刻まれた弟子は次ぎの十人である。

沖松浦 三人

地松浦 五人

桑ノ浦 一人

木立 一人



市蔵は帰郷後、先代の弟子達をその俣引き継いだと思われるが、その間なお相撲を取り続けていた若者は四人だけで、あとの九人は彼が死亡した明治四十一年までに引退か死亡していたようである。また、前記十人のうち四人を除けば、新たに弟子となった者は僅か六人しかない。このことは明治も後半頃から、相撲熱も急速に冷めていったと言えよう。

註 墓石には明治三十九年三月建立 若林良八こと正
面に八嶋山市蔵墓と刻んであるので、明治三十九年三月以前に死亡した人で該当者はいないか調べたが、吉

祥寺の過去帳にも若林家の位牌帳にもそれらしき人は
いなかった。つまり、市蔵は死亡する二年前に自分の
墓を建てていたことになる。

(五) 濱風甚六

本名は浪井勘六と言ひ、弘化三年（一八四六）蒲江町
西野浦に生まれた。子供の頃から並み外れた体軀に恵ま
れて相撲に励むようになり、のち大坂相撲に入門して嚴
しい修業に耐え、優れた「関取」となつて故郷に錦を飾つ
たが、ほかの力士と同じように弟子を取つていたかは分
からなかつた。

甚六が授与された「頭取」の免許状（写真）は大坂中
村芝吉・岩井伊之助の連名となつており、後述の大乃松
兼蔵や山嵐伊勢吉のような頭取時津風のそれとは付与者
が違ふが、免許の内容には大差はない。授与されたのは、
明治二十九年八月五十四才の時であつた。

西野浦にある早吸日女神社は、上筒・中筒・底筒の三
尊を主祭神とする海上守護の社として、昔から奉納相撲
は活気に溢れ、近郷近在から観衆が詰めかけて盛況を極
めたと言ひ、甚六は祭主に変わつて力士の手配や勧進役



かつたと言う。明治四十三年六月六十五才で死亡した。
生家は頭文字を取つて屋号を濱屋と呼んでいる。

(六) 大乃松兼蔵

本名は小川兼蔵、弘化三年（一八四六）八月、新名平
八(九)と同じ大野に生まれ、昭和十五年（一九四〇）八月、
古田伊勢吉の後を追うかのように、九十四才で天寿を全
うした。顕彰碑は大野の入り口県道脇にあり、昔は傍に
大きな桜が何本かあつて、憩いの場となつていたが今は

として、心血を注いでい
たのではないかという。
身が大きかつたことを
知る一つに、何年前寄
せ墓にした時、出てきた
脛骨を見た関係者は長さ
と大きさに驚いたとい
うから、背丈は相当なも
のであつたらう。

当主の話によれば、
代々背丈の大きい人が多

ない。

碑には明治三十八年（一九〇五）五十九才の時、大坂相撲時津風より、「相撲熱心の廉により頭取を命ぜらる」と刻まれている。五十九才といえ、引退後与えられたものと考えるが、現役時代の功績が認められてのことであらう。身の丈六尺有余の堂々とした体軀で、若い頃にはどこの宮相撲にも参加していたという。

昭和四年木立小学校が刊行した「郷土読本」によれば、子供の頃から素敵な相撲好きで、いつも寺子屋（当時木立には松樹庵という寺子屋があり、関常山という和尚が教えていた）仲間を泣かせていた。群童を抜いた体格と体力で、十四才の時から角

河津掛



道・浦代間で米俵を運ぶ仕事をしていたが、十六才の頃からは毎日二俵宛運んでいたという。若い頃山嵐の弟子となつて年と共に腕を上げたと言ひ、後年弟子に森ヶ崎・若錦などが輩出している。力自慢は百二十貫

（四三〇キロ）位の石を擔いで庭を三偏回つたり、八十才の頃米俵二俵を背板で運んだとかいった話がある。

相撲は二十代後半の頃、若宮八幡の奉納相撲で、久留米の力士若杉に続けて二番立ち合ひ、何れも「河津掛け」で勝ち名乗りを上げたという名場面が詳しく描写されている。大坂相撲時津風政衛門から授与された免許状は、前掲のとおりである。



船頭町に在住する孫娘から聞いた祖父大乃松の晩年は、体格が人並み以上であったため、夜具など並み外れの大きさであったこと、時折り尋ねてくる弟子達の面倒

をよく見ていたこと、食事に好き嫌いがなく何でも食していたこと、相撲にかけた執念ともいうか、生涯曲げを切らずに藁スボで結っていたことなど、少女時代の思い出を語ってくれた。また、山嵐伊勢吉(七)と同じ優待状を所持していたので、両親初め親族など、よく利用させて貰ったとも言っていた。

(七) 山嵐伊勢吉

本名は古田伊勢吉、弘化四年(一八四七)四月木立村棧敷西の平に生まれ、昭和十五年七月九十三才で天寿を全うした。顕彰碑は地区入り口の旧県道脇にあるが、碑文では伊勢蔵となっている。明治十三年(一八八〇)九月年僅か三十三才で、大坂相撲時津風藤八より「頭取」の免許を与えられた。

現役時代の逸話が、同じ木立の大野松や新名平八と比べて残っていないのは、弟子を持たずに一匹狼として年中各地の宮相撲や、勸進相撲を渡り歩いていた所為ではないか、と古老はいう。

浅海井公園にある瀧風孫平碑(明治八年建立)には、木立から伊勢吉(碑は伊勢蔵)と外に四人の名が刻まれ

ているが、伊勢吉はこの時二十八才の青年期であった。「郷土読本」によれば、一つ年上の大乃松は、初め伊勢吉の弟子であったとしているが、それ以外のことは何も書いていない。現役時代のことを知る人は今は誰もいないが、残された老後の写真からは豪快な体軀が偲ばれる。

時津風藤八より授与された免許状は残っていないが、何処の相撲でも土俵下で観覧できる優待状は見たことがある、と関係者は語っていた。



(以下次号)